

**8月29日（日）15:00～16:30**



## 私と学会の関係を捉え直す

—トキメキ学会参加するために—

両角遼平（広島大学大学院） ・ 小栗優貴（広島大学大学院）

### 1. 本企画の目的・背景・問題意識

企画者たちは、いわゆる“若手”として様々な学会や研究会に関わる中で、なぜ若手研究者の参加が少ないのだろうかという寂しさを感じていました。そもそも研究者の世界において、若い年代の人々の割合が少ないからではないかというご意見もあることでしょう。しかしながら、各学会の若手研究者や若手参加者に学会参加をためらう理由を聞いてみると、「研究者としての力量が未熟だから遠慮してしまう」、「学会の仕組みや作法を知らないし、知り合いが少ないから居心地が悪い」、「大会に参加したのはいいけれど、「それっきり」「やりっぱなし」になることが多くて、また行こうと思えなかった」、「学会本部を特定の大学OB/OGが仕切っていて、よそ者扱いされている気分になる」といった声が聞かれました。これらの声からは、若手研究者がそれまでの学会参加経験から、自己の肯定感や効力感を感じづらかったこと、そして他の参加者などからの応答性が低かったことを理由に、参加意欲が減退していった姿が見えてきます。

本セッションは、①学会が抱える参加意欲が生まれづらい環境と②既に構築されている社会（学会）に新参者として加わることの難しさの2点を問題としつつ、「私たちが研究という営みに感じた“トキメキ”を大切にしながら、学会というコミュニティにどう参加していけるのだろうか？」というやや大きなテーマについて、参加者のみなさんと考えます。

### 2. 本企画の内容

以上の目的・背景・問題意識をもとに、研究集会当日は現役院生である両角・小栗が若手の立場から学会参加の際に感じるもやもや、気まずさ、息苦しさのようなものを提起しつつ、参加者のみなさんのもつ複数の学会での経験を踏まえて語り合います。

1. 企画の趣旨説明
2. 自己の経験の対象化：これまでの私の学会への参加を振り返ろう
3. 視点の獲得：学会（社会）に“参加”するとはどういうことだろう？  
→両角と小栗による「既存の社会への“参加”」をめぐるいくつかの概念の説明
4. 経験の共有（ブレイクアウトセッション）：みんなの学会への参加経験（ストーリー）を聞いてみよう
5. まとめ：変化の激しい今・これからの学会に私（たち）はどう“参加”していくのだろうか？

### 3. 本企画の意義

- ・若手研究者が抱える“個人的な問題”を参加者のみなさんと共有し、“社会的な問題”として位置づけながら交流すること。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、昨年からは各学会の研究大会等のあり方が大きく変化してきている中で、これまでの自身の学会への参加経験を振り返り、これからの参加のあり方を考える機会を提供すること。
- ・参加者個々人のもつ複数の学会での経験を踏まえた語り合いを行うことで、研究コミュニティの情報交換の場になること。